

ドイツ・オーストリアの佛教學研究瞥見

岩 田 孝

早大東洋哲学科と Bonn 大學インド學研究所との共同研究は、1984—85年に Bonn 大學の Michael Hahn 教授を Bonn 大學と早大との交換協定に基づき、早大の客員教授として招聘したことを契機として始まったものである。半年間の滞在中、共同研究の爲の共通な基盤を定めるという目的で、Hahn 教授と筆者はそれぞれの専門領域—Hahn 教授はサンスクリット語の韻律、筆者は佛教の認識論—を互いに紹介し合った。その結果、佛教とインド諸哲學學派との交渉をマクロな問題意識として設定し、個別的には普遍の存在を巡っての論難や認識と言語の関係についての各學派の解釋の違い等のテーマを選び、筆者が Bonn 大學を訪れるまでの間、各自の視點から資料を集め準備することになった。その6年後、筆者は Hahn 教授からの招聘を受け、1990年3月より1991年8月までの間、Bonn 大學交換研究員として赴任し、また Marburg 大學客員教授として出講する機会を得た。以下はその間の共同研究及び諸研究所における研究の状況についての管見を纏めたものである。

Bonn 大學のインド學研究は1818年の創設以來、August Wilhelm von Schlegel, Hermann Jacobi, Paul Hacker 等の多く碩師を輩出している。(cf. H. Eimer, *Indology and Indo-Tibetology, Indica et Tibetica* 13 1988, pp. 9-20)。1955年に P. Hacker が獨立したインド學研究所の初代の主任教授になり、その後、チベット學とインド學の兩方の領域を研究する Frank-Richard Hamm 教授が引継ぎ、現在の研究所所長は Claus Vogel 教授である。Hamm 教授以後、インド學研究所ではあるが、チベット學と佛教學の研究も平行して行われるようになり、それがこの研究所の傳統になっている。筆者の Bonn 大學滞在中に、Hamm 教授の追悼記念論文集 (Frank-Richard

Hamm Memorial Volume. October 8, 1990, Indica et Tibetica 21, 1990) の出版祝賀會が催され、當時の學者の研究の様子、また傳説とも思われるエピソードを門弟である先學から直接聞く機會があった。その印象が深く残っていたのであろうか、研究室の古風な机に向かっていると、一瞬時を越えて Bonn 大學の連綿たる學問の流れに、しかもその相續轉變差別に預かり得るかのごとき思いを抱くことが有ったことを今でも鮮明に覚えているのである。

Vogel 教授のもとには、學術研究員である H. Eimer 博士、専任講師でインド哲學を専門とする R. Chorpa 博士が加わり、インド・チベットの哲學・文化についての総合的研究が進められている。Vogel 教授は、ここ數年 Veda や Brāhmaṇa の文獻をゼミにおいて講讀し、英譯、獨譯、サンスクリット語の注釋などあらゆる補助資料を机上に並べて精査しつつ、一字一句を丁寧に翻譯するので、インド學の學生のほかにも宗教學や言語學の學生も多く出席していた。Bonn 大學には、インド學研究所とは別個に中央アジア研究所があり、ここではチベット人の學者を初めとして多數の學者がモンゴルやチベット等の文化の研究に従事している。兩研究所の文獻所藏量は Hamburg 大學や München 大學と同様に多い爲、司書と學生の副手が図書を管理し、新刊書と古書の購入のチェックを缺かさない。中央アジア研究所の副手 Mathes 氏、インド學研究所の司書 Wagner 氏、副手の Wyzlic 氏には、早大にない諸文獻を紹介して頂き、また筆者の獨文論文の推敲の際にも貴重なアドバイスを頂いた。

渡獨の一年前に Hahn 教授は Bonn 大學から Marburg 大學に主任教授として迎えられた爲に、當初豫定していた筆者のゼミは Marburg 大學のインド學研究所にて行うことになった。ゼミでは、共同研究の一環として、比較的思想體系の確立されている後期佛教（六世紀以降）の視點から、佛教によるインド諸學派説への批判を考察するという目的のもとに、法稱（Dharmakīrti 600-660 A. D.）による普遍（sāmānya）實在論への批判を取り扱うことにした。このテーマは筆者にとっても好都合であった。というのは、十五年前ウィーン大學の Steinkellner 教授に師事した際に、教授の勧めにより法稱の Pramāṇaviniścaya（知識論決擇）の第三章（他者の爲の推論 Parārthānumāna）の翻譯の計畫を立て、最初の部分の推敲が必要となっていた所、その部分に普

遍實在論に関する記述も含まれていたからである。かくして Marburg 大学のオーバーゼミナールでは Pramānaviniścaya を筆者が擔當して読み、Hahn 教授が韻律の研究から Jñānaśrimitra の Vṛttamālāstuti を擔當されることとなり、ここに共同研究の第二段階がはじまった。この過程は無駄な回り道ではなかった。Hahn 教授が Bonn 大學所蔵のインド・ネパールのサンスクリット寫本のマイクロフィルムの中から偶然にも後期佛教の教義に関する綱要書と思われる作品を見だし — これこそが我々の研究対象となるということは二人の直観の一致するところであった — その解讀には、兩ゼミでの意見の交換が大變に役立っているからである。この小品は大部分が韻文からなり、毘婆沙師説から有相唯識・無相唯識説及び中觀派説に至るまでの佛教の諸説を纏めたものである。チベット譯の後期佛教の綱要書が多く現存するのに比較して、サンスクリット語原典のまま現存する綱要書の数が少ないだけにこの小品は貴重な資料である。奥書の部分は缺損し、正確な書名は今のところ不明である。またどの程度の部分が缺けているのかも明かではない。現在 Hahn 教授と共にテキストの解讀と翻譯を進めているところである。以上がこれまでの研究経過であるが、その成果は後に發表する豫定である。

次に、Bonn 大學、Marburg 大學、Wien 大學等における研究について、紙面の都合上、筆者が直接コンタクトのとれた學者の研究を、若手の學者の現在進行中の研究をも含めて、紹介することにしたい。Bonn 大學には、Hahn 教授以來の佛傳文學研究の傳統があり、助手の L. Both 氏が Kapiśāvadāna の多數の寫本の校訂に取り組んでいる。この作品では、Jñānākara という名の猿が布施の善行により、人間の子として再生し、またその間の佛への純粹な布施の心により、王として生まれ、後に佛陀となるという物語が、佛教 hybrid sanskrit によって描寫されている。Both 氏は、Kapiśāvadāna (ca. 1000 A.D.) の校訂出版と獨語譯、並びに類似した内容を有する Kavītāvadāna と Piṇḍapātrāvadāna との對照を行っており、その成果を學位論文に纏める豫定である。

S. Dietz 博士は、説一切有部の施設論 (Prajñaptiśāstra) の最初の部分で、世間の構成を論ずる Lokaprajñaptiśāstra を研究し、sanskrit の斷片（チベ

ット譯では第六章から第十四章に相當する部分)を既知のものを含めて整理しつつ、その概要を略説している (S. Dietz, A brief survey on the sanskrit fragments of the Lokaprajñaptiśāstra, Annual Memoirs of the Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute, vol. 7 1989 pp. 79-86)。また同博士は Lokaprajñaptiśāstra の漢譯, チベット譯, パーリ譯を對照することにより、原テキストに付加されたと思われる部分を、宇宙生成論の中の、湖や人間などの特定な記述を例にして明らかにした (S. Dietz, Zur Überlieferungsgeschichte der früheren Buddhistischen Kosmologie, 24. Deutscher Orientalistentag, vom 26. bis 30. September 1988 in Köln, Ausgewählte Vorträge 1990 pp. 442-449)。

Bonn 大學で Hahn 教授の代わりに學術交流の世話をして戴いたのが H. Eimer 博士である。博士は Atiśa 研究で知られ、1970年から1980年代にかけて多くの論文を發表されている (H. Eimer, Life and activities of Atiśa Dīpaṃkaraśrījñāna: A survey of investigations undertaken, Journal of the Asiatic Society, vol. 27, no. 4 1985, pp. 3-12; H. Eimer, Bodhipathapradīpa, Ein Lehrgedicht des Atiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna) in der tibetischen Überlieferung, Wiesbaden 1978 (Asiatische Forschungen 59.), VIII, 284 pp. 等)。佛教の解脱道の記述に用いられる諸用語の概念規定を行った博士の次の著作は、この領域を研究する者にとって有用である。H. Eimer, Skizzen des Erlösungsweges in buddhistischen Begriffsreihen, Religionswissenschaftliches Seminar der Universität Bonn 1976。また、根本説一切有部の律の中の出家事 (Pravrajyāvastu) のチベット譯の校訂を行っている。Rab tu 'byuñ ba'i gzi. Die tibetische Übersetzung des Pravrajyāvastu im Vinaya der Mūlasarvāstivādins. Nach Vorarbeiten von Frank-Richard Hamm und weiteren Materialien herausgegeben. 1. Teil: Einleitung, Zusätzliche Apparate; mit einem Exkurs: Beobachtungen zur graphischen Gestalt des früheren tibetischen Kanjur. 2. Teil: Text. (Asiatische Forschungen. 82.), X, 338, VIII, 337 pp. その他、ニンマ派の僧院の歴史についてチベット人學者 Pema Tsering 氏と共同研究した成果と

して *Äbte und Lehrer von Kaḥ thog. Eine erste Übersicht zur Geschichte eines Rñiñ ma pa-Klosters in Derge/Khams, Zentral Asiatische Studien* 13 1979, pp. 457-509 等が挙げられる。

Bonn 大學出身の若手の學者には Hahn 教授の門下生が少なくない。その一人である Michael Balk 博士は、チベット語の現存する Prajñāvarman の注釋を参照にした Udānavarga の研究を學位論文として發表した。Untersuchungen zum Udānavarga, unter Berücksichtigung mittelindischer Parallelen und eines tibetischen Kommentars, Bonn 1988. チベット譯とサンスクリットテキストとの對應にずれが有る場合に、韻律型を分析・判断の手段として用いて、サンスクリット原典に最も近い読み方を推定するという方法を用いた所に、この書の特色が見られる。以上が Bonn 大學の研究状況である。

Marburg 大學のインド學研究所にもインド哲學とチベット學をも含む佛教學の兼學の傳統が残っていた。古くはボン大學に移る前に Vogel 教授がチベット學を擔當し、その後 Hahn 教授が講師としてその講座を引き継いでいたからである。インド學研究所のスタッフは、助手の Ehlers 博士、講師の Golzio 博士、専任講師の Sharma 博士、名譽教授の Rau 教授、そして Hahn 主任教授である。Hahn 教授は、佛教のサンスクリット詩頌 (kāvyā) 及び韻律を専門とされ、その研究には常に文獻學に基づいた寫本研究、原典校訂が基礎に据えられている。學位論文である Jñānaśrimitra の Vṛttamālāstuti (當時はサンスクリットテキストが発見されておらず、チベット語譯のみから解讀) では、サンスクリット語、チベット語、モンゴル語を駆使して、韻律の構造を解明し、その精緻な文獻學的研究は他の追隨を許さないと言っても過言ではなかろう。早大での講演の際に用いた Ratnāvalī (寶行王正論) (サンスクリット語・チベット語・漢譯の三本對照テキスト) も代表的な研究として挙げられる。M. Hahn, *Nāgārjuna's Ratnāvalī, vol. 1. The Basic Text (Sanskrit, Tibetan, Chinese)*, Indica et Tibetica, Bonn 1982. また、Hahn 教授のチベット語の教科書 (*Lehrbuch der klassischen tibetischen Schriftsprache*,

Bonn 1971) は、ドイツの各研究所の佛教學研究生に用いられ、チベット學入門の必讀書となっている。1985年に *Indica et Tibetica* 10 に改訂版が出されている。最近の研究としては、Gopadatta の作と思われる *Puṇyarāśyavadāna* の校訂本と英譯がある。M. Hahn, *Puṇyarāśyavadāna — Another legend by Gopadatta ?*, *Indica et Tibetica* 21, Frank-Richard Hamm Memorial Volume, Bonn 1990, pp. 103-131. この説話では、二人の優婆塞による對論 — 佛陀は福德の有る方か否かについての對論 — を通して、佛陀が本來的には世間の凡夫の構想し分別するがごとき徳・非徳を超越した方であることが説かれ、その對論の様子が *anuṣṭubh*, *sārdūlavikrīḍita* 等の韻律型を用いて記述される。この作品が Gopadatta に歸せられるか否かは、今後 *Āryaśūra*, *Haribhaṭṭa*, Gopadatta の作品の文型の比較を通して總的に分析した結果決定されねばならない。そのほか中論の著者 *Nāgārjuna* の作ではないが、*Nāgārjuna* に歸せられる *Prajñāśataka* のチベット語譯テキスト及び譯注を出版されている。M. Hahn, *Hundert Strophen von der Lebensklugheit Nāgārjunas Prajñāśataka*, *Tibetisch und Deutsch*, *Indica et Tibetica* 18, Bonn 1990. この作品での *prajñā* とは修道に基づく勝慧ではなく、世俗の處世の知恵を意味する。*Prajñāśataka* では、この處世の知恵、それによって得られる法・利・愛・解脱という世俗の目標、さらには諸々の格言等が、類似例の指摘 (*arthāntaranyāsa*)、對比 (*upamāna*)、比喩 (*rūpaka*) を用いて詩的に説き示されており、類似例による説示法には、實踐道德や處世の道理を説く *Nīti* 文獻と共通する点がある、と Hahn 教授は指摘している。

Marburg 大學での Hahn 教授のもとでは、R. Steiner 氏が *Harṣadeva* (590-647 A. D.) 作の戯曲 *Nāgānanda* を學位論文のテーマとして研究を續けている。彼は、現在手に入る *Nāgānanda* の諸寫本及び流布本にはテキストの同異がかなり有ることから、これら諸テキストを精密に調べ、チベット語譯をも参照しつつ、*Nāgānanda* の原本に最も近いとみなされ得るサンスクリットテキストを校訂版として出すことを試みている。これが完成すれば、畫期的な業績になるであろう。更に、校訂しているテキストをコンピューターに入れ、サンスクリット—チベット、プラクリット—チベット、チベット—サンスクリ

ット／プラクリットの語彙集を作成中である。彼は、Nāgānanda の内容の紹介と参考文献を既に発表している。Preface and bibliography of the editions and translations of the Nāgānanda, The recensions of the Nāgānanda by Harṣadeva. vol. 1: The North Indian Recension, New Delhi, Aditya Prakashan 1991, pp. XI-XXI. 次の論文が間もなく掲載される予定である。Zur Akteinteilung von Harṣadevas Nāgānanda, Bulletin d'Études Indiennes 9 1991; Das religiös-philosophische Schrifttum Indiens, Neues Handbuch der Literaturwissenschaft, Band 24, Süd- und zentralasiatische Literaturen. Steiner 氏は、西洋哲學を副専攻とするだけあって、インド及び佛教の諸哲學にも興味を示し、快く筆者の Pramāṇaviniścaya の獨語譯や獨語の論文の校訂を引き受けて下さった。週に一度、ゼミの後に一緒に文献を読み、獨語の推敲のみならず、内容にまで入った議論ができ、有益なコメントを頂いた。將來共同して研究したいと思う學者の一人である。J. Schneider 氏も Hahn 教授の優秀な門下生の一人である。彼は、昨年チベット譯のみに現存する佛陀への贊歌 Viśeṣastava の注 Viśeṣastavaṭikā の校訂と翻譯を修士論文として提出した。これまで未研究であった Prajñāvarman の注をも含めて全譯した労作で、毎週彼の爲に時間を割いて指導された Hahn 教授の話では、幾分手直しをすれば學位論文にもなり得る仕事ということである。日本からも佛教大學の山極氏が1991年三月まで宗教學研究所に滞在し、有部の律の研究の指導を同教授より受けていた。

専任講師の Sharma 博士は、Bhartṛhari の言語哲學の専門家である。筆者のゼミにも積極的に参加され、Pramāṇaviniścaya のチベット譯の解讀の難しい箇所について、サンスクリット語の文面を想定しながら獨譯する際に、梵文の構文上の推敲をして下さった。Hahn 教授の五十歳のお祝いに、サンスクリット語の多數の韻律型を驅使した詩頌を贈られたのも同博士である。最近の論文に P. S. Sharma, Eight topics which form the subject-matter of the Vākyapadiya, Studien zur Indologie und Iranistik, Heft 13/14 1987, pp. 219-233. 等がある。

Sharma 博士を講師として迎えたのは、Vākyapadiya の研究で知られた

Rau 教授である。今は名譽教授となられているが、週に一度學生の爲に Kāśikā (vr̥tti) の講讀を續けられている。この様にサンスクリット文獻を讀むための文法學的基礎を常に學ぶことができるのは、學生にとって、また研究者にとっても、誠に恵まれた環境である。

ドイツ滞在中には、諸先生に個人的並びに學術上でお世話になった。Hahn 教授には、夏休みの期間中 IBM のコンピューター操作の手ほどきを受け、その後の獨文の論文作成に大いに役立った。Hamburg 大學の L. Schmithausen 教授の學恩は筆舌にて表現され得ない。筆者の學位論文の出版に際しては、獨文及び内容のチェックをすべて同教授が引き受けて下さったのである (T. Iwata, Sahopalambhaniyama, Struktur und Entwicklung des Schlusses von der Tatsache, daß Erkenntnis und Gegenstand ausschließlich zusammen wahrgenommen werden, auf deren Nichtverschiedenheit, Teil I und Teil II, Alt- und Neu-Indische Studien (Universität Hamburg), Stuttgart 1991)。また、1991年二月の冬學期最終日には、Hamburg 大學のインド・チベット文化研究所の授業をすべて休講として、筆者の講演會を催して下さり、誠に光榮の極みであった。十年ぶりの舊交を暖めるということもあってか、氣が付いた時には同教授宅に一週間も長居していたのである。その間、學問、文化などについて多くの事柄が話題にのぼった。特に植物を愛する彼の自然保護に關する話には説得力が有った。つい最近同教授より佛教の自然觀についての著書を賜り、その意図するところを改めて拜讀しているところである。インド佛教では、植物は意識・心を有する存在(有情)とは見なされない、というのが定説であるが、最初期には實は植物も有情と見なされた、又は少なくとも無生物と見なされていなかった、という點を文獻的に示し、何故に後になって無情とされたのかを論述した勞作である。L. Schmithausen, The Problem of the Sentience of Plants in earliest Buddhism, Studia Philologica Buddhica VI, The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo 1991; Buddhism and Nature, The Lecture delivered on the Occasion of the EXPO 1990, An Enlarged Version with Notes, Studia Philologica Buddhica VII, The International Institute of Buddhist Studies, Tokyo

1991.

一年半の在獨中、Wien 大學の Steinkellner 教授とも研究上のコンタクトを續けることができた。1990年の秋學期と1991年の夏學期に Wien 大學佛教學・チベット學研究所所長である Steinkellner 教授より講演と講義の招聘を受け、その際に長年の（1976年冬學期 Wien 大學で同教授ご指導頂いて以來の）研究課題であった *Pramāṇaviniścaya* の獨語譯及び譯注に着手する具體的な方法を検討した。既にこの書の第一章は T. Vetter 教授により、そして第二章は E. Steinkellner 教授によって獨語譯注がなされ、出版されている。残りの第三章獨語譯注に取り掛かることになったのである。現在の所、サンスクリット原典が散逸しているということになっているが、中國の北京にその寫本が現存するという情報がかなりの確實性をもって伝えられている。この様な状況のもとでは、取り敢えずチベット語譯のテキストをベースとして、サンスクリット語の斷片を集めながら、獨語譯注を進めるということで両者の意見が一致した。今回のドイツ滞在中にその第一歩を踏み出したと思っていたので、Wien 大學からの招待は願ってもない學術交流の機會となった。そこで、*Pramāṇaviniścaya* の第三章の最初の部分（vv. 1-3）までの譯注を用意し、講義のテーマの一つとして取扱い、Steinkellner 教授を初め、Wien 大學の研究所のスタッフと共に、内容の検討、意見の交換をする事ができた。同研究所では日本の船山、小野、吉水の三氏も研究に従事している。Hahn 教授、Schmithausen 教授、Steinkellner 教授には筆者の獨語の論文の推敲までも目を通して戴き、御高配に心から感謝している次第である。

Steinkellner 教授の最近の研究としては、來世の存在の證明を論じた Dharmottara の *Paralokasiddhi* に關する一連の論文・著書がある。E. Steinkellner, Dharmottaras *Paralokasiddhi. Nachweis der Wiedergeburt, zugleich eine Widerlegung materialistischer Thesen zur Natur der Geistigkeit, Der tibetische Text kritisch herausgegeben und übersetzt, Wien 1986; Nachweis der Wiedergeburt. Prajñāsena's 'Jig rten pha rol sgrub pa. 2 vols. Wien, 1988* 等。1989年には、第二回ダルマキールティ國際會

議を主催し、その Proceeding を編集されている。Studies in the Buddhist Epistemological Tradition, Proceedings of the Second International Dharmakīrti Conference Vienna, June 11-16, 1989, ed. by E. Steinkellner, Vienna 1991. Pramāṇaviniścaya の第三章のサンスクリット断片一葉を松田氏が発見し、そのテキストと英訳を松田氏と共同執筆で発表している。K. Matsuda and E. Steinkellner, The sanskrit manuscript of Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya, Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für indische Philosophie, Band 35 1991, pp. 139-149. 更に、オーストリア科学アカデミー研究員である H. Krasser 博士との共著 Dharmottaras Exkurs zur Definition gültiger Erkenntnis im Pramāṇaviniścaya, Wien 1989 では、Dharmottara による妥當な認識根據の定義が詳細に討究されている。その Krasser 博士の學位論文が出版されている。Dharmottaras kurze Untersuchung der Gültigkeit einer Erkenntnis Laghuprāmāṇyaparikṣā. Teil 1: Tibetischer Text und Sanskritmaterialien. Teil 2: Übersetzung, Wien 1991. また、同研究所の講師 M. T. Much 博士の學位論文 Dharmakīrtis Vādanyāyaḥ. Teil 1: Sanskrit-Text. Teil 2: Übersetzung und Anmerkungen, Wien 1991 も二月に上梓された。今や後期佛教の研究は Wien 大学の若手の學者に着實に引き継がれているのである。十數年前共に机を並べた頃を思い出しつつ、これらの書を読むに感慨深いものを感じるのである。

ドイツ・オーストリア佛教學研究を目の当たりに見て、西歐の若手の學者が文獻學的研究方法を基盤にして、より堅實かつ密度の高い研究を進めているという印象を深くした。特に傳統の有る研究所では、學位論文を執筆中の學生を、研究領域を同じくする先輩・講師陣が最初に指導して、その後に指導教授が最終的なチェックを行う、という二段階の研究體制が整っており、誠に羨ましい限りである。早大でも是非参考にしたい點である。今後は、外國の研究所との交流も盛んになるので、歐米の學者とのディスケットによる文獻交換が可能になる爲の、歐米型のコンピューターの導入、佛教研究に不可欠なチベット文獻の充實などが急務であると思われる。結びに一年半のドイツでの研究を可能にして下さった早大東洋哲學科の諸先生方に衷心よりお禮を申し上げたい。